

＜世界救世教系教団＞における EM (Effective Micro-organisms) 論争の領域仮説*

種 田 博 之**

一 はじめに

別稿で「胎教」という事例を通して、現代日本における知識様式の一つとして「科学的様式」があること、そしてこの「科学的様式」による知識は相対的に日常生活のあらゆる局面で見ることができ、「科学的様式」は知識様式の主たるものの一つでありうることを述べた¹⁾。「科学的様式」とは、必ずしも当該知識が科学的知識となることだけを意味しているのではなく、知識の一部もしくは全体に科学的な専門用語が配列されることで科学的知識であるかのように見えたり、あるいはそのことによって科学的知識からの逸脱を秘めている＜科学的装飾＞ないし＜科学的偽装＞を表す。「科学的様式」が現代日本で知識の主たる様式であるならば、科学から隔たっている局面においても、「科学的様式」を、もしくは「科学的様式」へと変容している状況を見ることのできるはずである²⁾。科学とまったく隔たっている局面あるいは対極に位置する局面の一つとして、「宗教」があるだろう。科学と宗教とは必ずしもつねに対立しあっていたわけではない³⁾。だが、今日の一般常識において科学と宗教とは相いれないものであるかのように思われている。例えば「宗教ブーム」や「宗教回帰」という言葉そのものがそのことを端的に表している。換言すれば、「宗教ブーム」な

どの言葉には、なぜ現代社会にそのようなことが生じているのかという含意が潜んでいるからである⁴⁾。このように科学とは対極に位置する宗教の局面において「科学的様式化」を見ることができれば、「科学的様式」が知識の主要な様式であることを示すことになるだろう。

詳しくは後述しているように、＜世界救世教＞ないし＜世界救世教系教団（＜世界救世教＞から分派した教団、あるいは影響を被っている教団群のことを指す総称）＞という新宗教がある。＜世界救世教＞は、科学（もしくは医学）の批判を基軸とし、まさしく科学の対極に位置していた。今日、これらの教団が科学に対して、どのような立場をとっているのかを見ることによって、いわば宗教の局面における「科学的様式化」の一端を窺うことができるだろう。すなわち、今日、＜世界救世教＞あるいは＜世界救世教系教団＞のEM [Effective Micro-organisms = 有用微生物群（以下、EM と略記）] という微生物群への対応を通して、各々の教団の科学に対する立場に変化を見ることができるのである。換言すれば、そうした教団の科学に対しての領域仮説そのものに変化が窺えるのである。したがって、本稿は＜世界救世教＞、とくに＜世界救世教系教団＞の「世界救世教（新生派）」と「MOA 世界救世教（再建派）」がEMについて、いかなる領域仮説にもとづき、どのような論理構造で説明しているのかを見て

*キーワード：世界救世教系教団、EM (Effective Micro-organisms)、科学的様式

**関西学院大学大学院 社会学研究科博士課程後期課程

1) 拙稿「知識の科学的様式化—『胎教』に関する言説の分析—」参照。

2) 「胎教」という事例もこのことが妥当する。すなわち、戦後まもなく「胎教」は科学とは対極に位置する「俗信（迷信）」とみなされていた時期があったが、その後、「胎教」は一八〇度異なる科学へと「科学的様式化」することになった（拙稿「知識の科学的様式化—『胎教』に関する言説の分析—」参照）。

3) 例えば、Merton, R. K. (1970) 参照。

4) 『日本人の宗教意識』参照。